２　学習指導案作成の手順と留意点

ステップ１　学習指導要領の確認

学習指導案を考える際には、まず、その学年で児童にどのような資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）を育成するのか、指導の見通しをもつために学習指導要領を確認することが大切です。単元（題材）の目標等については、学校の年間指導計画に明記されていますが、その文言を正しく理解するためにも、学習指導要領や該当教科の解説編に目を通して確認しておくことが必要です。これは、詳細な教材研究を行う前に、ぜひともしておきたいことです。

なお、「単元」とは、いくつかの教材や活動で構成された一連の学習活動を指します。音楽、図画工作、家庭においては、「題材」と言います（以下、「題材」を省略する。）。

ステップ２　児童の実態と課題の分析

育成を目指す資質・能力を視点にして、児童の実態を把握、分析し、課題を明らかにします。

実態把握に当たっては、ノートや作品を見直したり、学習評価のための補助簿を読み直したりする等、具体的な資料に基づいて考察することが重要です。また、学級全体を総括的に見るだけでなく、個々の児童の変容に目を向ける等、多様な見方をしていくことが大切です。

ステップ３　単元の目標・単元の評価規準の設定

単元の学習指導に当たっては、どのような資質・能力をどのような学習活動を通じて育成するのか、単元の目標を明確に設定することが重要です。さらに単元の目標は、児童がどのような学習状況であれば達成できたと判断するのか、そのよりどころとなる評価規準を児童の具体的な姿として設定することで、より現実的なものとなります。

単元の目標と評価規準を設定するためには、学習指導要領に示された目標や内容、児童の実態及び前単元までの学習状況等を踏まえて、必然性のある内容にすることが重要です。年間指導計画においてその単元の目標や評価規準を確認するとともに、年間の系統性や前後の単元との関連についても押さえます。

また、この段階で、単元の中心となる学習活動をおおよそ想定しておくことも必要です。学習活動の最終段階で、どのようなことをどの程度までできるようになることを目指すのか、児童の学習状況を具体的に思い浮かべることで、目標や評価規準に具体性と必然性をもたせることができます。

評価規準の設定に当たっては、国立教育政策研究所発行の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（小学校、中学校）」（令和２年３月）を参照するとよいでしょう。この中で、「評価規準とは、観点別学習状況の評価を的確に行うため、学習指導要領に示す目標の実現の状況を判断するよりどころを表現したものである。言い換えると、児童が学習を通して身に付ける資質・能力の状況を、学習評価を行うまとまりごとに、学習内容に基づいて表したものである。」と説明しています。

ステップ４　指導と評価の計画

ここでは、単元の目標を達成するために、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」に目を向け、児童の学習活動の流れを中心に据えて、単元全体を見通した指導と評価の計画を立てることが重要です。教科によっては、数時間のまとまりごとに「次」を構成することもありますが、その場合も全体を見通した学習活動の構成を考えることが必要です。

学習評価については、日々の授業の中で児童の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要です。そのため、どの段階で児童の何を捉えて評価するのか、評価規準と実際の学習活動に即した評価方法を計画します。その上で、評価規準に照らして、観点別学習状況の評価をするに当たり記録を取る計画を立てることが大切です。観点別学習状況の評価に用いる評価については、原則として単元や題材等内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行う等、児童全員の学習状況を記録に取る場面を精選し、かつ適切に評価するための計画が重要になります。

評価規準を設定することにより、指導内容を児童の活動のレベルまで具体化することができます。このことは、単元の目標が達成できたときの児童の姿をイメージすることにつながり、指導のための手立てや必要な教材・教具も具体的に思い描くことができます。

実際に学習評価を行う際には、学習の成果だけでなく、学習の過程を一層重視することが大切になります。特に、他者との比較ではなく児童一人一人の持つ良い点や可能性等の多様な側面、進歩の様子等を把握し、児童がどれだけ成長したかという視点を意識しておくことが大切です。

ステップ５　本時の目標の設定及び展開の作成

「本時の目標」を設定する際には、単元における指導と評価の計画との整合性に留意します。基本的には、指導と評価の計画を作成した段階で、各時間の学習内容や評価規準等を考えていますので、それらを基に設定します。

「本時の展開」を考える際には、主体的・対話的で深い学びの視点からの児童の学習活動

の流れを軸にすることが大切です。「各教科等の『見方・考え方』を働かせ、どのような資質・能力を、どのような学習活動を通して育成するのか」という発想で、１時間の学習活動を組み立てていくようにします。そして、児童が学習課題を捉え学習活動の見通しをもって主体的に活動するためには、指導者としてどのような働きかけをすればよいのか、指示や助言、様々な学習形態の活用、個に応じた指導・支援等、様々な手立てを準備しておくことが必要です。このような手立てを学習活動の流れと併せて考えておくことで、児童の主体的な学習活動が引き出され、充実した内容で１時間の授業を展開することができます。

ステップ６　本時の評価計画

本時の評価計画を立てる際には、本時の目標と一体的なものとして捉え、育成を目指す資質・能力が、どの学習活動に最もはっきりと現れるのかを考えて計画することが大切です。

１時間の授業のどの場面で、どのような児童の姿が見られると、「おおむね満足できる」状況（評価規準）と判断するのか、また、どのような方法で評価するのか(評価方法)を計画します。併せて、「十分満足できる」と判断される状況と「努力を要する」状況への手立てについても考えておくことが必要です。指導と評価の一体化とは、授業の中で、評価規準を用いて的確に評価を行い、指導することであると言えます。「努力を要する」状況にいる児童に対しては、その場で有効な手立てを講じ、支援や指導をする必要があります。

また、指導者による評価とともに、児童による相互評価や自己評価等を計画することも大切です。例えば、本時の学習を振り返る場面で、児童が自身の学びや変容を自覚的に捉えたり互いに認め合ったりする学習活動を行うことにより、児童自身の学習の意欲の向上にもつながります。

このように、児童の学習状況を的確に捉え指導の改善を図るとともに、児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするために，学習評価の在り方は大変重要です。